

<モザンビークでのボランティア経験を終えて>

百聞は一見に如かずー アフリカ、モザンビークでボランティアとして働くことを決めた理由はそこにあります。

“どうしても世界を見たい。知りたい。新しい人々と出会いたいー”

自分がメディアを通してしか知ることのできない未知の国で、全く別の文化の中で生きる人たちのことを、自分という媒体を通して全身で感じたかったのです。

私が働いた農業学校について

私は、このCICCDのプログラムに9月チームとして参加し、2006年3月から、モザンビークのカボ・デルガード州、キサング地区、ビリビザ村の農業学校で6か月間働きました。この農業学校は、7年生までである小学校の次の中等学校にあたり、生徒の多くは15歳から19歳です。年齢を重ねてから学校に通うようになった生徒も多く、20歳を越えた年上の生徒もたくさんいます。大半の生徒は学校の寄宿舎で共同生活をしていて、その他村から直接通う生徒もいます。村には電気と水道は通っていませんが、隣り合っている教員養成学校の発電機が稼働すると、農業学校でも夜3時間の電気と一部の水道が使用できます。（これは、私がプロジェクトを去る頃になって、大幅に改善されました。今ではインターネットがひかれ、やはり毎日ではありませんが、一日9時間の電気を使用できるとのことです。）しかし大半の生徒は、井戸や川から自分で水を運び、シャワーや飲み水として利用しています。



ビリビザ村の風景



農業学校

はじめて私が派遣地に赴き、実際に学校から任された正式の仕事といえば、2年生の2クラスに週2回、90分間ずつ、基礎英語の授業を準備することだけでした。自分を最大限に忙しくさせるつもりで来たはずなのに…と先制パンチをくらった思いでしたが、どのプロジェクトへ派遣されても、自分をどう貢献させるかは自分のアイディアとそれを試行させようとする行動力、仲間同士の刺激や協力です。他の海外ボランティア団体が、参加者に対してどのような事前研修や仕事を任せるかは

分かりませんが、私たちの学校が派遣する先のプロジェクトへの関わり方は、このプログラム参加に際して専門的な技術・資格を要求しないかわりに、すべて自分次第です。

2年生へ英語基礎の授業

2年生の英語の授業をはじめる前に、現地の先生が教える様子を見学させていただきました。現地の先生は、英語のみを使用して、英文法を中心に授業をしていました。私は同じプロジェクトで働くもう1人の開発インストラクター（以下DI）と話し合い、歌やゲーム等を取り入れ、かつ生徒1人1人とのコミュニケーションを意識した、もっと楽しめる授業形態にトライすることに決めました。ポルトガル語を使う不安もあり、私たちふたりで、いっしょに授業を受け持つことにしたのです。現地の先生たちの立ち振る舞いからは、その地位を生徒への権威行使に利用していると感じることが多く、生徒と私たちのオープンでフランクな関係づくりや、また、アクティビティを含めた新しい授業づくりが、少しでも彼らにとって、オルタナティブな教育観念を与えるきっかけになればと思いました。また、自分が英語という外国語を習得していった過程で大事だったのは、聞こうとすること、話そうとすることだったという経験も生かしながら、仕事仲間のDIと、毎回ふたりで授業内容を相談していました。

初めての授業は、とても緊張しましたが、私のつたないポルトガル語もあたたかく受け入れてくれる生徒に、感動したのを覚えています。教師として教えた経験が皆無な私は、毎回反省すべき点が山ほどありましたが、それは同時に“学んで”いることの証だっただと感じています。

もちろん授業へのモチベーションは生徒個人によって異なりますが、音楽が好きな点は共通していて、一度歌を教えると、恥ずかしがらずにダンスまでつけて、自分から歌おうとしてくれます。

“もう1回歌おう！”とせがまれることも何度もありました。生徒は、外国人である私たちにとっても興味を示し、躊躇せずにたくさん話しかけてきてくれます。正直で寛容です。

本気で怒った経験もあります。成績を決めるためのテストを行ったときのことです。カンニングの嵐！いくら注意しても隣の人としゃべることを止めず、コピーのし合いっこです。全く悪気なく行うのです。日本の中等学校のようにほぼ全員が進級できるわけではなく、落第も多いにあり得る彼らにとって、“点数”はとても大事です。そういう理由があったとしても、カンニングを許可するわけにはいかないのです。生徒に何度も“合格点をとらなくてもいいから、自分の勉強のために自力で解きなさい”と言いつつ聞かせましたが、残念ながら彼らとその意味をきちんと理解してくれたとは思えません。習慣から来ているとも言えるカンニング



英語の授業風景

に対する考え方は、この学校だけの問題でなく、モザンビーク全体の学校教育レベルに関わってくる大きい問題のように感じました。進級に際する教員への賄賂が、モザンビークに蔓延している深刻な問題の1つで、実際にこの農業学校でも起こっている話だと生徒から聞きました。先生たちの、教育や生徒への誠実な態度が、この国の学校教育発展の鍵だと実感しました。

3年生へ英語の課外授業開始

私の働いた農業学校では、国のカリキュラム変更に基づき、今年から1、2年生の英語の授業を開始したので、2年生の英語の授業では、アルファベットの発音の仕方や、あいさつ、体のパーツ名といった基礎の基礎から取り組みました。

しかし、3年生の生徒からも“英語を勉強したい”という声を多く聞いたので、学校側に頼んで、正式な時間割外の、英語の特別授業を設けてもらいました。5人のDIで5クラス分の3年生を担当し、成績をつけず、本気で英語を勉強したい生徒のみ対象で、週1回90分間、英語の課外授業を始めました。私のクラスは、63名中毎回15人程の生徒が出席していました。生徒の授業へ臨む態度は真剣で、学びたいという意欲と共に、必死に板書していた姿が印象的です。農業学校でも、教員養成学校でも、大半の生徒は、どの教科の教科書も持っていません。それゆえに、彼らのノートがそのまま教科書になるのです。知識の源泉となるノートは、とても貴重な財産です。英語の課外授業では、私が用意していた内容が終わった後も、毎回生徒の質問が絶えず、終了時間を延長して教室に居残るのが日課になっていました。私は、その時間が毎回とても楽しみでした。

何人かの生徒は、私の家にも個人的に質問しに来てくれるので、（私たちが生活した家は、教員養成学校の教員用寄宿舎と同じ並びにある1棟で、両学校の敷地内にあるため、生徒とコミュニケーションをとるには絶好の場所です。）家の外にある机といすに座って、マンツーマンで教えることも度々ありました。生徒たちは、よく私たちDIの家におしゃべりに来たり、授業の質問に来たりしてくれます。

夜のプログラムも1つの仕事



週に何度か、生徒が夕飯を食べた後の空き時間を使って、映画を見せたり、日本を紹介するプレゼンテーションを見せたりしました。映画を見せるときには、前もってその映画の舞台となっている国、その背景や簡単な歴史を、告知のポスターに記し、少しでも教育的になるよう配慮することが大切だと思います。また、景品付きのダンス大会が開かれたこともありました。ろうそく1本やコンドーム

1つなどがそれに相当します。

科学実験を使ったマジックを教えるクラブ活動などを企画したら、勉強とエンターテイメントが合わさった、とてもおもしろいアイデアだったと思います。

黒板の再塗装



農業学校の黒板がとても書きづらく、字も読みづらかったため、黒板の再塗装をしました。生徒の長期休暇を利用して行いましたが、何人か残っている生徒も手伝ってくれ、美しい緑色になりました。

エイズ啓発イベントの企画

6月に1度、農業学校のダイニングホールを利用し、私を含めた4人のD Iで、エイズを啓発するイベントを行ったことがあります。学校に、今年より創設されたH I Vクラブの生徒とのコラボレーションです。私たちはコーディネーターであり、参加した生徒たちは自分たちでアイデアを出し合って、自分たちで組織できる力があります。彼らは、学年対抗のエイズに関する〇×クイズと、自分たちで創作した劇を行いました。

D I側としては、生徒にできることは生徒に任せて、私たちにしかできないアプローチ方法での参加をしたいと考えていました。2人のD Iが、プロジェクターを使っての大画面で、エイズ基礎知識のプレゼンテーションをしました。彼女たちがインターネットを使って検索した、幾枚もの性感染症の写真つきです。これは、“画像や映像を見る”ことに餓えている生徒にとって、インパクトが強かったと思います。



また、私たちは、近隣の村から女性のゲストスピーカーを招待しました。彼女自身H I V感染者ですが、生徒たちの前に立って、自らの闘病体験を語ることを承諾してくれたので、彼女が部族語で話し、もう1人の付き添いの男の人がポルトガル語に訳すかたちで実現しました。生徒たちの中には、実際のH I V感染者を見たことがない者も多く、とても真剣に耳をかたむけていました。しかし、逆

に、“感染者が自分で名乗るわけがない。うそをしゃべってるんじゃないか”と疑った生徒もいたことを後で知り、これはリアルな反応だなどと思いました。

生徒たちの間では、エイズの存在を認めなかったり、コンドームについて嘘の噂が流れていたり、勘違いや偏見がまだまだたくさんあります。私たちD Iの間で、3年生対象で週1回、性教育に関する特別講座などを計画していましたが、結局6か月の間に実現できずに終わってしまいました。国の未来を担うティーンエイジャーへ、正しい性の知識を身につけさせるのは重要なので、どんなかたちでのアプローチにしろ、次のD Iに引き継いでいってほしいです。



エイズ・イベントで行った劇

生徒用寄宿舎の現状

私の働いた農業学校は、教員養成学校と比べて、生徒用寄宿舎のコンディションが決して良くなく、男子生徒の中には、ベッドもマットレスもなく、莫菴1枚で寝ている子もいます。また、蚊帳やロウソクも学校から配給されないため、大半の生徒がそれらを使わずに生活しています。また、食事のバリエーションも十分でなく、分配される量や順番をめぐる、頻りにけんかが起こったりもします。こういう状況をふまえて、それらの現状改善に手を貸せなかった自分に、本当は何ができたのだろうと考えることが今でもあります。給食向けに、畑の実習で育てる野菜の種類を工夫する提案をしたり、食材の学校予算配分やマーケット価格のチェック等を行って調査と改善をしようと奮闘することもできたはずですが。また、現状をデジカメ撮影した画像とともにレポートを書き、企業に協賛を求めるといっても1つのアイデアだと思います。

6か月という期間は、自分で、ここに生きる人々に何が必要なのかを客観的に判断するにも、本当に短すぎる時間だと実感しています。私は、プロジェクトを去った後、新しく得た情報や他のひとの意見等を通して、その半年の間に自分が模索し見出せなかったことに数多く気づかされました。

幼稚園でのボランティア

以前、公式な仕事が、週2回の英語のクラスとその準備のみと聞きがっかりしたと書きました。教員養成学校と農業学校の両プロジェクトに派遣されたD Iは、私を含め6人でしたが、他の4人ともそれぞれ分担し、4つある村の幼稚園のうちの1つに、自主的に毎朝通うことに決めました。村に幼稚園があるという情報を以前派遣されていたD Iから聞いていたのです。子供たちと関わる仕事に携わりたかったのも事実です。私たちD Iは4つすべての幼稚園を担当して、現地の先生たちのお手伝いをすることに決めました。

私の通った幼稚園は、現地の先生2人と教員養成学校の教育実習生の生徒が1人で運営されています。正式な校舎などはなく、木や竹、干草などで建てられた小屋と、大きなマンゴーの木の下に広がる影が教室がわりです。公式な授業時間は朝の7時～10時ですが、どの先生も時計を持っていないので、日によって大幅に異なります。名簿上の子供たちは160名ほどいますが、実際に来るのは毎日40～60名ほどで、誰が来るかは、これもその日次第です。また、子供を幼稚園に参加させるのにお金はかかりません。



マンゴーの木の下での授業風景

現地の先生との教材作り



私が通い始めてまず1番初めに気づいたことは、先生たちが毎日同じ歌を子供たちに歌わせて授業が終わってしまうことです。“歌う”ということは、彼らの文化においても、欠かせない、重要な能力の1つに違いありません。しかし、子供たちに教えられることは、もっと幅広い分野にわたってたくさんあるはずですが、そこで、先生の家を訪ね、私が提供できる紙や色ペンを使って、一緒に教材作りを始めました。私たちがトライしたのは、

ポルトガル語の基礎となるアルファベットや数字を教えるイラストカードです。イラストも、ヤギやキャッサバ等、彼らの生活に密着したものから探しました。また、私が通った後半3か月では、チョークで絵を描く授業も数回行いましたが、その際の絵のお手本を先生が自主的に作成してくれたりしました。

幼稚園に先生が来ない…収入開発の必要性

私が次に気づいた、この幼稚園の根本的な問題があります。—これは私が半年働く中で1番苦勞したことでもあります—先生たちが毎日幼稚園に来るというモチベーションに欠けていることです。それは、先生たちがボランティアで働き、お給料をもらっていないことが影響していると思います。まず、“先生たちが幼稚園に来て子供たちに教える”という基礎スタイルを定着させるのが最大の課題

であり、残念ながら最後まで明確な結果を出せなかった、幼稚園存続に関わる芯の部分です。

そもそも、この4つの幼稚園プロジェクトは、カボ・デルガード州の開発ワークに取り組む他の活動団体の1プロジェクトであり、彼らの傘下にあります。月に1度、この団体のプロジェクトリーダーと先生たちの集会があり、幼稚園運営の問題点やイベント企画等の話し合いが行われます。しかし、実態は、日常的に先生が何をどのように何時間教えているか、子供はどれくらい来ているのか、そして、先生は毎日幼稚園に来ているのかどうかさえ、誰も管理できていないのです。私は、とにかく毎日、3人の先生の家すべてに足を運んで幼稚園に行こうと誘いに行っていました。そして、幼稚園で子供たちに教育を受けることの大切さを話していました。私たちD Iが何かを与えることで先生たちを毎日呼ぶこともできましたが、それは結局サステイナブルではないと感じました。先生自身が感じて、その内面が変わらなければ、結局持続していきません。反面、普段彼らが教える様子からは、子供たちと関わる仕事に対する楽しさや喜び、誇りが見えることも確かであり、それがボランティア精神を支えているのも確かでした。だから、なんとかその感情を、毎日幼稚園に行くという責任感や意欲に発展させられないものかと考えていたのです。さらに、私の通う幼稚園の先生の1人は、奥さんといっしょに莫産の原料となる乾草にやすりをかけて編み、それを売ることを通して家族を養っています。だから、無償で働く先生より、お金になる莫産編みに時間をかけたい気持ちは分かるし、むしろ必要不可欠です。正直なところ、幼稚園で働くことを通して、何らかの利益が、継続的に彼らに戻ってこない限り、このままボランティアとして働き続けるには限界があるのではないか—これが、私たちD I間での客観的な結論です。幼稚園の教育レベル発展や創造力あるアイデアの思考も、それに至るモチベーションがなければ難しいと思うのです。私たちはその結論を出すのにこの半年間を費やしたので、次のD Iにその提案を伝えました。

(先生たちが、全くの無償という語弊があるかもしれませんが。統率にあたる団体が不定期に開催するワークショップに参加することで、度々フルーツジュースやビスケットがもらえます。また1度だけ小額のお金をもらった経験もあるため、それがお給料のかわりに、先生たちを少なくともその職に留まらせている理由だと思いました。ジュースやビスケットは、普段彼らが購入できないほどの贅沢品に値します。)



幼稚園の先生とミーティング

おやつ提供とその変遷

先生たちの要望により、子供たちにおやつ提供を始めることにしました。はじめ、先生たちは、週に1度ビスケットやジュースを買ってほしいというアイデアを提案してきました。しかし、もうひと工夫したい私たちは、小麦粉とイースト、まき木を買うかわりに、先生たちにパンを作ってもらおうという方法で4つの幼稚園を統率しました。これで、先生たちが受身で待つだけでなく、おやつ提供という1つの活動に参加せざるを得ない点がポイントです。働くDIは、各幼稚園により異なりますが、特に寄付に関わるアイデアなどは、すべての幼稚園に格差が出ないように、慎重に進めていきました。私は、モノやお金を与えて仕切る別の組織の役人ではなくて、あくまで現地のボランティアと同等の（これは、生活スタイルを含め、本当に長期戦で彼らといっしょに働く努力をしない限り、ほぼ無理な話ですが）幼稚園運営に関わる一員として、これがどうしたら彼らの手で、持続可能な発展を進めていけるかをいっしょに考えていきたいと思っていました。だから、彼らの金銭感覚に衝撃をあたえるような額を簡単に払ったり、支援したりすることに対しては、いつも敏感でいるようにしました。そういった状況をなるべく避けて、良い意味で私に頼ってほしくなかったからです。この関わり方は、何をするにも時間がかかるし、むしろ始まらないこともあったし、良いか悪いかは個人的に意見が分かれると思いますが、私はこれでよかったと思っています。

話を戻しますが、こうして始まったおやつ提供は、より多くの子供たちを幼稚園に呼んだり、彼らの栄養状態の改善につながります。私の幼稚園では、焼いたパンを預かっていた先生が、私用の取り分を確保するということが起きたため、後で責任者の先生を替えたり、何度も厳格にパンの数を数えて、一緒に確認するようにしました。

しかし、ある幼稚園の先生が、彼自身で生み出し、1年以上あたためていた、おやつ提供の別のアイデアがあって、それを各幼稚園が順次取り入れていくことになります。それは、コミュニティ（子供たちの親）も巻き込んだ、もっと自分たちの力でおやつシステムを構築していこうとする、よりサステイナブルな方法です。

そのアイデアとは、先生自身が園児のいる家庭を1軒1軒訪問し、各家5本ずつのとうもろこしを寄付してもらおうというものです。ビリビザ村の人口の99パーセントは農家なので、現金収入はないにしても、農作物は豊富にあるのです。そして、回収されたとうもろこしを機械で粉にし、それに砂糖を加えて、“パパシユ”と呼ばれるお粥のようなを作ります。（現地の人々は、パパシユをよく朝食に食べます。）これが、子供たちのおやつとなるわけです。機械の使用料金と砂糖に、まだ外からの支援が必要だとしても、見事なアイデアだと思いました。何より、ビリビザ村の現状をよく配慮しています。さらに、とうもろこしを寄付した家の親は、もちろん自分の子供にパパシユを食べてもらいたいので、

幼稚園に送り出すことに積極的になるという効果も発揮するのです。逆に、寄付しなかった家の子供は、原則パパシュを食べられません。

さっそく私の幼稚園でも、このアイデアを実行しました。はじめ、先生自身、親からの寄付が受けられることを信じていませんでした。“どうせ文句を言われて、断られるから”と、回収に行くのを渋っていました。しかし一旦説得して、一緒にコミュニティを歩いてみると、多くの親が普段の先生の働きぶりを認めてくれ、賛同し、協力してくれました。とうもろこしのない家には、2メティカル寄付をお願いし、それは砂糖を買うお金に回すことにしました。毎朝の幼稚園の仕事は、歌を歌ってコミュニティを歩き、子供たちを呼び集めることからスタートします。先生が、子供たちを迎えに行くような感じです。だから、多くの親が先生の顔見知りであった点も、とうもろこし回収に効果的だったと思います。回収中、1人の母親が、パパシュを作るボランティアとして、立候補してくれたほどです。2日間歩き回って、週に2・3回、2週間持つほどのとうもろこしが集まりました。これが、私がプロジェクトを去る少し前のことです。

しかし、やはりここでも、使っていないはずの粉が減っていたり、砂糖が密かに売られ、そのお金を先生がお酒に使ったりという事態が発生してしまいました。私がプロジェクトを去る3日前のことです。どうしようもなく悲しく、正直裏切られたような気持ちになりましたが、これが現実です。前述で記した通り、幼稚園の収入開発（インカムジェネレーション）のアイデアが必要です。とうもろこし回収からパパシュになるまでの一連の仕事は、時間外に働く、荷が重すぎる仕事であるのは確かです。先生たちにしてみれば、ボランティアとして働くだけでは割に合わず、持続していくのは困難です。親の寄付の限界など、改善の余地は多いにありますが、現地の先生が自ら幼稚園を運営していこうとする上で、重要な一歩を踏み出したことに違いはありません。

最後に

一何かを劇的に変えようとするのではなく、彼らが長い間築いてきた、“彼らの”伝統や文化、考え方、生き方などを知ろうとし、聞こうとし、感じ取ろうとし、その目線で、自分の経験や知識を使って、それを無意識に押し付けることがないよう注意しながら、何か手伝おうとすること—これが、ビリビザ村でボランティアを始めてから気づいたことであり、モットーとしていたことです。少なくとも、あのビリビザ村で半年間生活してみて私が感じたことなので、すべてのプロジェクトに当てはまるかと言ったら、そうではないと思います。

この半年間を通じて、“援助する”という言葉は、開発の仕事にふさわしくないと感じるようになりました。“上から下”“ある者からない者”という意味合いが強い気がするからです。もちろん、バングラデシュの災害支援など、津波や地震などの災害に見舞われた地域の復興に関しては、世界中どこでも、そこに“援助する”というのは自然なことでしょう。しかし、開発という分野においては、“手伝う”という言葉の方が、いっしょにアイデアを出したり、主役とな

るべき、手伝いを受け取る側の人々の文化や意見を尊重するような意味を含んでいる気がするのです。ものづくりをする際、人と協力するために大切な精神となる、平等性が感じられます。一方から与えるばかりでなく、“お互いの良い部分を交換し合って、創る”という、開発の関係性を表していると思うのです。



さらに、このプログラムを通して、“貧困”の捉え方も変化しました。日本から出たことのない私は、“貧困”についてうまく想像するのが難しかったのが現実です。しかし、モザンビークでの経験を通して、この世界が勝手に作りあげている“貧困”を実感しました。例えば、“水道が出なくて

てかわいそう” “一日に1ドルも稼げないほど貧しい”などです。彼らは水道がなくても、清潔な水を手に入れることができる川や他の水場を知っています。彼らは、現金収入はなくても、決して飢えることのない十分な量の食料を持っています。これらを苦しくて、貧しいことだと思って、彼らは今まで生きてきたのでしょうか。

私は違う気がします。彼らは、水を川まで取りに行くことを自然の摂理として、受け入れてきたと思います。また、例えばボロボロになった服を着ていても、少し新しめの服を1着、学校や教会用に大切に持っていることだって、私は知りませんでした。普段のボロボロに見える服は、貧困の証と言えますか。

もちろん場所や生活環境の違いがあっても、一概に定義できないとは思いますが、人によって、貧困という言葉そのものの意味も違ってくると思います。ちなみに私の意味するこの言葉の意味は、そこから苦痛や支障が強られる場合です。いずれにしても、彼らの生活に対する相対的偏見や思い込みから来る“貧困”や、そのきっかけでもあり、偏った情報と共に映像・写真を伝えるメディアが造った“貧困”が存在している、と実感した事実には変わりありません。

そういう自分なりの意見も含め、私が経験してきたことは、すごく貴重なものだったと思います。それは、もちろん多くの失敗や後悔、反省を含めてのことです。

そして、最後になりましたが、私がこのプログラム中に出会った世界中の人たちに感謝と敬意を表します。

Thank you for the beautiful people and the beautiful time!

By Yurika

